課題作文

［これは、セブンイレブン記念財団が募集する「海外研修」（ドイツに6人派遣）に、勧められて期限ギリギリに応募した駄文です。元あった文に最近の偽らざる心境を書き込みました。原文には写真はありませんが、見やすくするため少し入れ、加筆もしました。］

磯津環境学校　共同代表　萩森繁樹

1，現在の活動について

教員を退職して、かつての四日市公害の激甚地・磯津で､｢磯津環境学校｣を勝手に始めてまる3年。この4月から4年目に入り通算38ヶ月、少々がむしゃらに走ってきた。そして今、逡巡の中にある。否、それは正直に言うと 2年目辺りから迷いとの闘いだったと言ってもいい。

（1－1）「磯津」における「環境学校」と「磯津通信」

［磯津環境学校］（別綴、ダイジェスト版参照　　略）

磯津と言う地域を選んで「環境学校」を立ち上げたのは他でもない。磯津が四日市公害の最大の被害地であり、公害裁判の原告９人が暮らした町だからである。

当初の願いは、駐車スペースもあり「磯津公会所」を環境・福祉の複合施設として想定しながら、その拠点で、若者や子どもたち、若いお母さんお父さんたちが集まる元気な「環境学校」ができたらいいなあと考えたのである。

ここ数年で四日市公害資料館が博物館と併設で話が進められているが、磯津というところで、日常的に、環境と地域の課題を考える「再生と学びの場」が大事だという思いは変わらない。敢えて付け加えるなら「若さ」を発信していなくては本当の資料館足りえないと思っている。

始めて１年間の磯津環境学校は順調だった。（2010 年）

① ５/１　野鳥観察…56 名、第１回で盛況。子ども 38 人大人 18 人で絶妙のバランス。
② ６/６　海辺の植物観察…51 名、子ども 33 人大人 18 人。五感を使って海辺の自然体感。
③ ７/10　河口で貝とり…48 名、子ども 28 人大人 20 人。初参加、鈴鹿亀山からも参加有。
④ ８/７　オリエンテーリング…11 名、子ども６人大人５人。真夏にするものではない。
⑤ ９/11　流木アート…52 名、子ども 25 人大人 27 人。盛況これは夏休みの定番にすべき。
⑥ 10/９　原色押し花…26 名、子ども 13 人大人 13 人。２回シリーズ。塩浜の子ら参加。
⑦ 11/３　買い物ゲームと料理…44 名、子ども 23 人大人 21 人。フードマイレージ学習。
⑧ 12/４　冬鳥の観察…16 名、子ども７人、大人９人。風強く、寒い日。参加者少なし。
⑨ １/10　連凧上げ…30 人、子ども 19 人大人 11 人　冬の青空に見事に連なり凧あがる。
⑩ ２/12　クロッキーと漁の話…15 名、子ども３人大人 12 人。最低。絵は苦手なのかな。
⑪ ３/５　春を探して食べよう…23 名、子ども 13 人大人 10 人。中嶋先生には世話になる。
〈　以下略　〉

3 年経った最近は、参加の中心だった楠の教え子たちも中学生になり忙しくなって足は遠のいた。代わりにいそかんの理念を応援してくれる方が遠くから子どもや孫を連れて参加して下さる。

子どもが減った原因はいくつかあると見ている。ひとつは同じことをしているマンネリ化も原因かも知れない。それと塩浜小学校は協力的に全児童にチラシを配布して下さるが、子どもたちがそろばん・習い事・塾、放課後の社会体育等で忙しく、市直営の塩浜児童館も行事で子どもが集まりにくいと聞く。一番ターゲットに考えている磯津の子どもたちも同じ状況なので、まだ子ども会とのコラボは持ちかけていない。磯津の全町に回覧板での広報を 4 地区の自治会長さん方がして下さるが、たまにしかやってこない。むしろ、子どもたちより、シニアの方が自然や環境を考えて顔を出して下さる。

［冬の連凧あげの風景］

内容面でも、いつだったか凪咲（なぎさ）と母のトモヤンが来てくれたとき「春探しなので外かと思った」という意見はとても象徴的な感想で、つい部屋の中での調理が中心になったり、「お膳立て」して作品作りをするだけだったりの環境学校では本来の意味が薄れている。もっと野性的で「自然の中へ！」の当初の思いは大事にしたいところである。

［磯津通信］（近刊、36～38 号同封　　略）

位置付けは、磯津・塩浜、楠の地域の掘り起こしと記録、広報である。

現在は 400 部ほどをクロネコで郵送、70 部を磯津の支援者の方に直接宅配, 80 部ほどを 10 数カ所の楠、塩浜、四日市の公共施設に置かせてもらっている。後は郵送費の切り詰めで 200 人ほどにはインターネットで「20 日メール」を送ってＨＰで見ていただいく形で協力・購読してもらっている。

当初から内容的にねらってきたことは、

① 地域の掘り起こし聞き取りと再記録化。「人」と「希望」を登場させたいと。
② 楠・塩浜地域の「地域の現実の課題」を共に考えたいと意識している。
③ 環境学校「いそかん」の実施報告と次回の案内。
④ 全国情勢も知りうる限り取り上げようとしている。
⑤ 「アジアから世界から」の欄は Think Globally Act Locally の理念の具体化、就中（なかんずく）アジアの知られない現状を伝えたいと思っている。
⑥ 英文のページはかっこをつけて無理をしているが、ここには本音を書いている。やがては HP で世界発信をする体勢に備えている。（サンプル参照、2 例ほど。青い紙　略）

こうした最初のねらいは変遷しつつも基本的には受け継ぎ続けて来た。そして、地域の課題を私なりに捉えて、ミニコミ紙としてのジャーリズム精神を発揮してきた自負は少々ある。

幸いたくさんの支持者を得、たくさんの反響をいただき、カンパを訴えさせていただくと３０万円を越える浄財があっという間に集まり、かえってそう簡単に放り出すわけにはいかないという気分になっている。毎月 20 ページ分の取材と記事をそろえて発行するのは、趣味のようなものとは言え、出すことが目的化してきていた。

そこに後輩の女性から手紙が届いた。たくさんのねぎらいの長い文面の最後に「磯環はきちきちと、毎月発行しなくてもいいと思います。隔月でも、誰が困るというのでしょうか。先生はもっとゆったり芳醇な時間を持つべきだと思います」と。負っていた荷が私の肩からすうっと軽くなっていく気がした。

確かに編集作業はなかなかの神経と頭を使う。しかも印刷した後、拾って重ねて、折り、封筒詰めし、セロテープで封をして、クロネコシールを貼って送り出す一連の作業を共にしてくれる若者たちがいてくれたから今まで続いてきた。が、彼らも新しい夢に向かって学び直しを始め、今は忙しい。

紙面を支えて寄稿してくださる皆さんの力も大きい。北陸からベトナムから、

特にアジア・アフリカの旅紀行、地元磯津の方言調べ等、なかまの皆さんの応援あればこそ。私一人で繋げてきたのではない。

（1－2）出会いと支えがあったればこそ

この 3 年間、私は磯津に通うことができた。あっという間だったが、なんとか逃げ出さないで通い続けられたのは、支えて下さった人たちが山ほどいたからである。

○　楠や塩浜の子どもたち、親御さん、そのお友だち、児童全員にチラシ配布を快く了解してくださった現地塩浜小の校長先生方と広がりは大きい。もし仮に「磯津環境学校」なんて開いても子どもたちが来てくれなかったら成立のしようがない。懐かしく来て、私を「月１回の先生」に戻してくれた子どもたちに私は手を合わせるように感謝したい。

子どもを連れて参加してくれるお母さんたちの中には私の小学校教師時代の教え子もいる。３０数年を経て、今再び新しい出会いがそこにある。楠の子どもたちが大きくなってからは、キャサリンと愛、世紀・三宝の三世代の参加と励ましは何よりも大きい。

○　楠・磯津で飛び込みなのに優しくしていただいた方々の恩は大きい。

最初に声を交わした漁協のやっちゃん（セリをする人）、私を呼び止めて磯津とナスバナの手ほどきをしてくれた光一（みちかず）さんの娘弘美さんに始まり、聞き取りで出合わせていただいた皆さん、はまゆうクリニックの磯野先生、原告石田かつさんの息子さん夫妻、楠民俗資料館の杉中先生、いつも優しい笑顔で迎えてくださる石田正之さん夫妻、はっきりものを言うが本質をつく今村徳一しづ子さん夫妻、いつ行っても気持ちよく迎え入れてくれる患者の今村茂久子さん夫妻、心優しくずっと支援して下さる森前自治会長と後任の幸次さん・東町前自治会長の駒さん、見守ってくれている民生児童委員の小宮さん、鯨船を愛してきた山源（やまげん）今村隆司氏・永野夫妻・定文さん、早朝の宅配の時後ろから追っかけてケーキを下さった小林夫人、バッチ網漁の船に乗せていただき最近特に世話になる漁師伊十六さんと良男さん、はっきりものを言うが気安い患者の英生さん、押し花の時一人でも生徒になってくれたか

つえさん、気を許せる船大工の大田さん、気の合うダンプの西野親子、応援してくれる歴代の磯津保育園長と沙耶香…とこの３年間の出会いは私を幾周りも大きくしてくれた。

○　勇気をくれた人たちの存在も大きい。

IJC（磯津ジェットクラブ）の宏樹くん、その叔父にあたる三十八さん。このお二人には磯津での大事な夢と希望をいただいた。公害で消された「平和町」のことを現地で掘り起こしてくれた栗山さん、石原労働者で適格な分析をしてくれた渡辺さんにも勇気とは何かを教えていただいた。マル伊水産社長の松浦くん、山源の太一くん、教え子香奈子と結婚し今磯津に住む真也くんたち夫妻の若さと礼儀正しさも私に未来を感じさせてくれる。お便りをくださる皆さん、詩で励ましてくれる友人とありがたい。

中日新聞の元記者のＯさん、毎日の元記者Ｉさんたちに私の活動を押し出してもらって今があると言っても過言ではない。三重ＴＶのＳさんは今も四日市公害を自分の生い立ちと重ね合わせて番組作りをしてくれて私に勇気をくれる。

○　環境学校と実務・編集を支えてくれる皆さんには本当にお世話になっている。

あまりにも近すぎて忘れそうだが、いつも磯津公会所の鍵を開けてくださった北町前自治会長の岩和さん（ご逝去）、度々講師をしてくださる画家の伊藤宏さん、ベジフルおばさん元教師中嶋千絵さん、凧と遊びの名人山下潔さん、流木で世話になった大工の須藤さん、野鳥の会の市川さん・安藤さん、植物・貝・カニなんでも専門家桐生さん、地元の滋先生（ご逝去）、高校で小学校で授業をさせていただいた菅さん・阪井さん、押し花の恩師喜多先生、公害保健教育の鳥井・加藤みはる大先輩、塩浜駅でギャラリーを開く「トップ企画」の今村さんと枚挙にいとまがない。

袋詰めの若者たち、真里、竜士、一樹、紳平、隼人、あゆみと武藤君。時には私が長期の旅行に出るといそかんの開催・運営もしてくれる。いそかんのマスコット（ゆるキャラ）のいそカン太といそカンナをデザインしてくれたのは工業高校を出て再度絵の道をめざす教え子浩之、通信が付くと必ず長い励ましの手紙をくれる群馬の大澤さん、黙って北海道のおいしいものを定期的に贈ってくれる岡部さん、署名のお願いをすれば何十名も周りに声をかけ届けてくださる清水さん、佐山さん、愛ちゃん…。

環境問題に詳しい教え子で大阪でアセスを仕事にする瀬口くん、「アジアから、世界から」の執筆者を紹介してくださる谷畑さん、書いて下さる小出さん、山下さん、ビルマ人ココラットさん…今は磯津の方言の 20 回連載を約束し、寄り添ってくれる桜井さんとたくさんの友人に支えられている。

○　漁協や行政、全国の皆さんにもお世話になっている。

磯津漁協の組合長旭（きょく）さんにはいつもお世話になり大事にしてもらっている。旧楠漁協川村組合長さん、四日市環境保全課、三重県下水道公社南部浄化センター、四日市港管理組合、河川事務所、市議会議員、三重県環境保全事業団三田処分場の大平さんたちの皆さん。

公害原告団の郷さんや宮本先生も時折励ましの電話や手紙を下さる。訪ねてからぐっと身近になったミナマタの野中さん夫妻、坂本資料館長、患者会の大石会長、ほっとはうすの加藤さん、倉敷水島の大田さん、藤原さん、患者会の見本と私が思う名古屋の南区患者会の伊藤さん、沢さんには今本当に暖かく抱えてもらっている。最近署名などを通して親しくなった東京川崎の患者の会の石川さん、池田さん、尾崎さん、小池さんは私が「全国」を意識するキーパーソンである。つながり、励ましを受け、ここまで来たという感じが強い。

そして、毎月訪ねると気持ちよくチラシを置かせて下さる資料館やセンターの女性スタッフの皆さんの笑顔と声をかけて下さるのが身近ですごく嬉しい。

○　スタートの恩人を忘れない。

磯津・楠でこんなボランティアをしたい、恩送りをしたいという原点は、幼くして命を奪われた谷田尚子ちゃん、服部吉秀くんであり、野田さんである。自分の子どもや孫と重ね合わせて、無念や思いを感じられる歳になった。許すまじ公害、忘れてなるものかこの思いの原点に居る尚ちゃん、吉秀くん。毎日持ち歩く私のかばんの中には二人の顔写真と記事が入っている。

（2）今の磯津を見つめて（活動の課題）

現在の磯津は、漁業も獲れるものは少なく生業（なりわい）になっているとはいえない。少子高齢化はこの町でも進んでいて、保育園児も磯津の子は現在１２

人（１～５歳）。戦後２３年間途絶えていたのを再興した四日市指定無形民俗文化財「鯨船行事」も十数年続いたが今は休止して 10 年余の歳月が流れる。盆踊りも復活の若い模索はあったがまだ再開できていない。

公害認定患者はこの町だけで今も 70 人近くみえ、四日市の他地区と比べると断トツに多い。それと同じくらい問題なのは 1988 年の公健法改悪以来、未認定の患者が多数放置されて、優に患者は 100 名を越え、20 数年が経過していることだ。行政や企業は「公害は克服した」と言うが、この四日市公害の原点磯津では今も公害の被害は歴然と残っている。そして、この町の人々の心の中に「公害」を通してできた亀裂は幾重にも人びとが和解するのを妨げていると言っていい。

時折、アイアンクレー、フェロシルトで物議を醸しだす企業や環境基準緩和で喜ぶ企業、ダブルスタンダードでアジア諸国で公害を出し続ける企業がここ四日市にもあるが、人々は四日市公害の闘いの成果である「米本判決」でそれを見、弾劾しようとしないで、別問題として扱い、結果的には免罪し、市民の権利意識に目隠しをして、その育つことを醸成はしてこなかった。それは 80 年代の四日市の教育において顕著だった。

おまけに磯津という町が、この四日市の中でも一種差別されていることを磯津の人で気付いている人はいるが、他地区の人びとにはそれは見えない。「公害は終わった」コールがどれだけ「第三者」的に多くの「当事者」を傷つけているか分かっているだろうか。最近盛んな「夜景ツアー」で四日市がもてはやされ、公害の代わりに「ふるさと紹介」で用いる人もいる。しかし、それは自分自身が自分の依って立つ基盤を見ないで、同じ四日市市民（三重県民）でありながら加害者として対応していることにはならないだろうか。

そんな中、よそ者の私が実にえらそうだが、私的に磯津の当面の課題は三つあるとみている。一つは生業＝漁業の問題、これは時代の趨勢の中でいかんともし難い部分があるが、しかし、今も漁に出てみえるのは確かで、その漁獲物を町の特徴として宣伝し提供する知恵はまだみんなで出せそうだし、四日市最後の漁協としての役割をアピールする余地はまだあると思っている。

二つ目は公害被害の問題である。四日市市内でも一番密度の濃い公害被害者を抱える磯津、しかしその中は大変複雑である。野田さんを表にたて内外に公

害の歴史と今を語るスピーカーとしてきた結果、実は次に続く人がいないようにみえる。もちろん、皆さん自身の被害実態をリアルに語ることはできる。しかし、運動団体を率いて行政交渉などをするには一定の経験と力を必要とする。ましてや、認定されないが同じ症状を呈する人は増え続けており、その人たちを組織して、県市と渡り合うには少し大きな視野が要る。

公害資料館は造られ、歴史的継承は一定可能となろうが、磯津において患者や被害者・家族を寄り添い、幾重にも複雑にされた磯津の住民感情を解きほぐし、町の歴史に位置づけ、柱にして行くには並大抵ならぬ信頼と指導力が要る。

もう一つは郷土文化・町づくり・絆づくりの象徴としての「鯨船行事」である。金銭的、組織的、人的、あるいは時代の趨勢で再び止まっている鯨船。しかし、これへの磯津の人々の待望の念は地下水脈のように脈々と流れていると私は信じている。

（少し話は違うが、先刻、隣の鈴鹿市玉垣で「唐人おどり」を守り育てた友人和田佐喜男さんが本を出されたのでお祝いに伺い、お聞きした話は私の心の中に百倍の勇気をくれた。まだ、私は何も情熱を持って話しかけていない。この稿は，別に新聞記事を載せ、その感想として書いてあるのでそれを見て欲しい。）

（3）課題解決に向けて

かく言うものの、自然は再生してきている。鈴鹿川河口ではシジミ、アサリ、カキまでも獲れる。この町を後にする若者もいるが、潮騒（しおさい）と朝日が好きで住み続ける人も多い。「自慢できるふるさとにしたい」「磯津に誇りを取り戻したい」その希望の声は嘆きを語る後ろで出番を待っている。それを実現するキーワードは「若者たち」だと私は思っている。

今まで 3 年間でいささか関わってきたことをいくつか紹介するがこれは言うほどのものではない。（各項詳細　略）

① 公害資料館づくり
② コンビナート防災
③ 地域ジャーナリズム
④ 鯨船の聞き取り
⑤ 漁師が木を植える
⑥ ボートピア問題

２，日本の環境市民活動の活性化ために

（これより下は課題作文の項目にあったので自分の体験を誇張して背伸びして書いたものだが、いたってカッコを付けて書いたもので大したことではない。）

●教師経験者としての視点

日本の学校教育における主権者教育は貧弱である。こと環境教育となるとゴミ拾い・分別教育、〇〇マーク集めなど心がけ主義に陥り、地域を深くつかんでどうそこの課題を捉え、解決するかの問題意識に乏しい。地域の課題をリアルに視る力、それを集団的に解決する力を醸成すべきである。

●弱者の視点で

知的障がい児者の施設の理事をしている。ケアホーム建設に取り組んでいるが、障がい者の目で環境市民活動にどんな参加が可能か。今は空き缶つぶしや有機農業に取り組んでいるが、もう少し深めたい。

●人権の視点

永く人権団体アムネスティインターナショナルジャパンの活動を三重でしてきた。世界には平和と環境に関わる見過ごせないマイナス面が多い。グローバルと人権の視点で日本の見えにくい問題に陽を当てたい。

●自治会長の視点

生まれ育った町で自治会長に推され、ヨチヨチの仕事をしている。日々寄せられる要求は住民の具体的で、日常的な願いである。それを離れて大きな環境問題を論じていても根無し草で、空論になるかも知れない。

Think Globally Act Locallyである。

３，今回の研修で学びたいこと

① 「磯津発世界行」の今の自分の取り組みに普遍性はあるかドイツの訪問先でぶつけてみたい。聞くだけ、見るだけでなく、自分が四日市でしていることを話し、できれば対等に討論したい。

② 政治・行政と「環境制度」でたとえ民主主義的伝統は違っても、取り入れられるもの、長い時間をかけて培うものなどを峻別して学んできたい。

③ 学校現場の様子は、子どもたちがどう育っているか、そこをこそ見てきたい。

④ 磯津に関わりながら切実に思うことだが、町づくり（町の再生）をどう進めるか、マイナスからの出発とさえ思える磯津をどう捉え、「よそ者」でも何ができるか検証できないものか。英文（Theory of a “Stranger” 『よそ者論』　略）が入れてある。正直な気持ちだが、こんなことドイツでもある？

⑤ 「地域の主権者を育てる」と言う視点はずっと私には強い。そこは環境問題に関わらずとも広く意見交換したい。　（後略）